

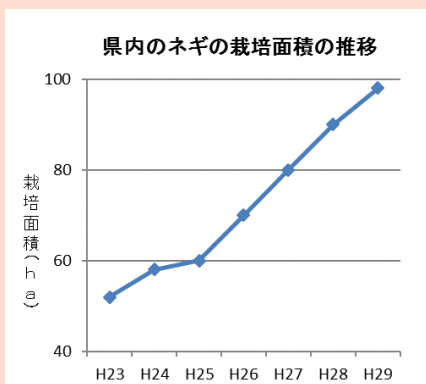
- 福井県の気象条件に合った新品種、作型(初夏～越冬春収穫)を確立し、**ネギの迅速な普及拡大**を目指す。
- 農業革新支援専門員が中心となり普及、試験研究機関、JA等と連携した**技術解決チームを結成**し、技術実証と**早期の普及推進**を図る。
- ネギの作付面積は、平成30年度に**130haを目標**とする。

## 具体的な成果

### 1 ネギの普及拡大

- 技術解決チーム会で技術実証圃を設置、検討した結果、新規品種や作型を導入することになった。収穫期間が延長し、栽培面積が拡大した。(H26→H29)

**栽培面積 70ha → 98ha**



### 2 推進体制の構築

- ネギの早期普及拡大を図るため、農業革新支援専門員が農林総合事務所、農業試験場、JA等をコーディネートし、**技術解決チームを設置**。
- 技術解決チームにて**共通課題を設定し、各普及指導員が現地実証**を行い、その結果を共有して課題解決にあたった。

### 3 栽培指導の統一化

- 技術解決チームにおいて、農業革新支援専門員、普及指導員が**ネギ栽培マニュアルを作成**。

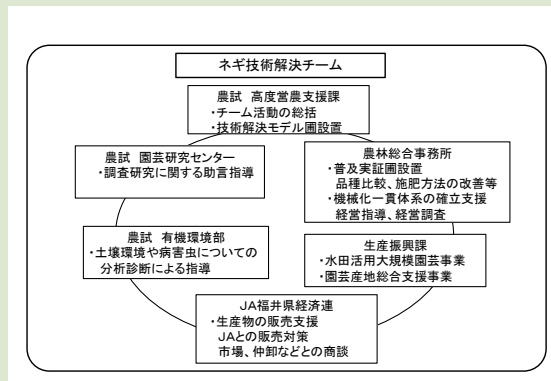
マニュアルができたことで、統一した栽培指導を行えるようになった。



## 普及指導員の活動

平成26～29年

- 農業革新支援専門員、農林総合事務所(普及指導員)、農業試験場、JA等で構成する**技術解決チームを立ち上げ、開催**



- 周年栽培の確立**による**機械や雇用者の年間**を通じた**活用**に向けた、**作型・品種の確立**

- 新規作型(初夏どりの)の実証・検討
- 安定した収量確保、品質向上対策
  - ・主要病害虫の防除研修会
  - ・農業試験場から発生予測情報発信
- 既存生産者を対象とした規模拡大推進

## 普及指導員だからできたこと

・専門技術を持ち、試験場や他県の技術を知る普及指導員だからこそ、**新規の品種や作型を実証し、地域に適していることを確認し普及させることができた。**

・日頃から連携しているJA、試験研究、県行政が**生産と販売に関する情報共有を図り、産地全体の取組を進めることができた。**

## 水田活用による周年ネギ産地を目指して

活動期間：平成26～30年度

### 1. 取組の背景

本県では、水稻主体の農業生産が行われているが、基幹作物である水稻の価格低迷に伴い、農業所得を増加させることが急務となっている。そのような中、園芸を取り入れた複合経営を確立するため、露地品目ではネギについて、技術解決チーム会を軸として、①共通試験の実施による生産性向上対策の検討、②経営収支の把握により、指導者がレベルアップを図れるように活動を行った。また、作付推進においてJA等の関係機関と連携強化を図ることが重要であり、JA営農指導員を対象とした園芸専門指導員養成講習の支援も行った。



チーム会による実証圃巡回

### 2. 活動内容

#### (1) 作期拡大に向けた品種・作型の確立支援

生産が拡大するに伴って、市場からは年間を通じた供給を要望されている。そのため、ネギ技術解決チーム会を開催し、作期拡大に向けて、①水稻作業と競合しない、②単価が安定している、③栽培に手間がかかりすぎない作型として、新規作型（初夏どり）試験の設計について検討し、各地区で大苗育苗の実証圃3か所を設置した。また、チーム会を定期的に行い、各地区の実証圃を巡回して情報共有を図った。

#### (2) さび病の発生予測をもとにした防除体系の検討

チーム会において、農業試験場からさび病発生予測情報の提供を受けた。各地区の発生状況と照らし合わせた結果、精度はあると思われた。

#### (3) JA園芸専門指導員の養成支援

高度営農支援課がリーダー的立場として、JA園芸専門指導員養成講習会を開催し、水田園芸（ネギ）の生理生態、栽培方法、病虫害防除について講習を行った。

### 3. 具体的な成果（詳細）

#### (1) 作期拡大に向けた品種・作型の確立支援

初夏どりを目的とした大苗育苗の実証圃（福井、奥越、坂井）で現地研修を開催した。各地区で設置した実証試験結果から、初夏どり（大苗育苗）は、地域に適した播種時期等についてとりまとめ、栽培マニュアルに反映させる。

## (2) さび病の発生予測をもとにした防除体系の検討

技術解決チーム会において、さび病の感染好適気象条件が生産現場の発生状況と関連性があることがわかった。その結果を受けて、農業試験場は総合的な病虫害防除体系としてとりまとめ、今後現場で活用するとともに、発生予測情報を発信する。



発生予測に基づいた適期防除の実施

## (2) J A園芸専門指導員の養成支援

J A園芸専門指導員養成講習会には県内9 J Aの営農指導員15名が参加し、栽培技術の習得が進んだとともに、普及指導員と連携しながら現地指導する必要性が理解された。普及指導員と同じ視点で栽培指導できるように、普及指導員と同様に、指導対象農家を対象とした生産・販売・経営データを収集することを説明し、実際に優良事例として研修会内で発表を行った。



実技を取り入れた講習会

## 4. 農家等からの評価・コメント（大野市の山本氏）

初夏どりは慣行の2割高い収益を得られる有望な作型であり、そのためには大苗育苗技術は必須である。福井県における大苗育苗技術が確立され、周年出荷できるようになると新たに栽培に取り組んだり、規模拡大する生産者が増えるのではないかと期待している。

## 5. 普及指導員のコメント

（坂井農林総合事務所農業経営支援部 主事 竹内 想陽花）

ネギは県域品目であり、技術解決チームにおいて周年出荷に向けた大苗育苗の実証を各地区で行い、結果を検討できたのは参考になった。

また、主要病害であるさび病は生産現場で手こずっており、発生予測情報があると適期防除を生産者に指導することができた。研究結果を現場で迅速に活用することができるのは有意義であった。

## 6. 現状・今後の展開等

技術解決チーム会において、下記について取り組む必要があると思われる

- ・連作障害・地力向上対策として緑肥や堆肥、土壌改良資材の施用
- ・病虫害対策としての輪作体系（アブラナ科、イネ科）
- ・初期生育の確保に向けた育苗技術の改善